

「波に吞まれて」

・本郷 優 高校二年男

・山本 灯 高校三年女

灯≧ 死んだ彼に会いたい。そう思うのは、願うのは、ワガママだろうか。

SE 波の音

優 今日の海は荒れてるね。夏の海だ。

灯≧ 波音が、彼の声を乗せてくる。もう会うことが出来ない、彼の声だけを。

優 どうして、また来たの？

灯 優の声を聞けるから。

灯≧ 海へと伸びる堤防の上。私は制服のまま寝転んでいた。月明かりが雲に隠れた。

灯 ≧来ない方が、良かった？

優 嬉しいよ。でもこうして寝ていたら襲ってしまいかもな。それこそ波で…一瞬で。

SE 波の音

灯 それも…いいかも。

優 冗談だよ。灯にはまだ生きててもらわな

いと。俺の分まで。

灯≧ 磯の香りが目にしみる。小さな波が心の中まで波及する。どうしようもなく、苦しかった。

灯私、高校卒業してもずっとここにいます。

優灯：

灯優のことと忘れないし、ずっと一緒にいたい。消えたりなんて…しないでよ。

優灯：知ってるか。人って、声から忘れるんだ。だから、もう…

SE 波の音

灯≧波の音が、うるさかった。彼の声は聞こえなかった。そう最初から、ずっと…

灯ねえ、神さま。ただのワガママです。どうか一度だけ、彼に会わせてください。そしてたら二度と…二度と…忘れないのに。

灯≧やりようのない想いと声は、空に浮かぶ月と一緒に…波に吞まれていった。